

新刊紹介

著者	清水 建美, 中田 政司, 鳴橋 直弘
著者別表示	Shimizu Tatemi, Nakata Masashi, Naruhashi Naohiro
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	48
号	1
ページ	102-105
発行年	2000-08-31
URL	http://hdl.handle.net/2297/00055292

新刊紹介

○ Iwatsuki, K., Boufford, D.E. and Ohba, H. (eds.) : **Flora of Japan** Vol. IIc. A 4, 328 pp., Apr. 30, 1999. Kodansha. ¥33,000 excl. tax.

待望の1冊を漸く入手することができた。英語版新「日本植物誌」である。このシリーズは今までにシダ植物・裸子植物の Vol. I (1995), キク科以外の合弁花類の Vol. IIIa (1993), キク科の Vol. IIIb (1995) の3冊が出版されていたが、この4冊目は離弁花類の第1冊目として、トウダイグサ科からセリ科まで49科が収録されている。印刷部数は限定500と聞いていて、したがって大変高価で個人的な購入にはきびしいものがあるが、日本の最新の維管束植物誌として関係者は早めに求めておく必要がある。7月に長野で行われた国際植生学会でも紹介しておいた。購入は販売元の講談社に照会すればよい。(清水建美)

○ 鳴橋直弘(編著) : とやま植物物語 とやまライブラリー7 A5変型判, 229頁, 2000年6月1日, シーエーピー, 2,000円(税別)。

昨今、生物多様性の保全が人類の使命として世界的に喧伝されているが、その実効をあげるためには、地域の人びとが地域の自然を十分理解していることが前提となる。この本は、富山県在住の編著者が県下の植物研究者に号令し、民間の植物愛好者を対象として富山県ゆかりの54種の植物の案内を試みたものである。内容は3章立てで、第1章「富山県で見つかった植物」ではエッチュウミセバヤほか14種、第2章「富山県で面白い植物」ではアイノコセンニンモほか17種、第3章「富山県民にしたしみのある植物」ではタテヤマズギほか20種が取り上げられ、植物の白黒写真に時には線画、時には分布図を混じえながら、1種につき3-6頁の縦書き「である」調の実に分かりやすい植物案内が展開されている。読者は好きな植物の項から好きなように読み進めばよい。自らの郷里にこんな植物があったのか、この植物はこんな生活をしていたのかなど専門家にも教えられるところが多い。この種の本にしてはコケ類や藻類も取り上げられているのも特徴である。冒頭には4頁にわたってカラー写真があるのも嬉しい。(クロユリが青ユリになっているのは残念である。) 県内はもちろん県外の皆さんもこの本の一読後は植物に大いに興味を持たれることと思われる。この本から植物研究のための新しい戦力が生まれることを期待したい。なお、編著者の鳴橋直弘氏に直接申し込みれば、1冊1,800円、5冊以上なら1冊につき1,600円(いずれも送料込み)で購入できる。申し込み先は、〒930-8555 富山市五福3190 富山大学理学部生物学教室あて。(清水建美)

○ 中山至大・井之口希秀・南谷忠志: 日本植物種子図鑑 四六倍判, 642頁, 2000年2月25日, 東北大学出版会, 19,000円(税別)。

石川氏の「原色日本植物種子写真図鑑」(1994)、浅野氏の「芽生えとたね」(1995)に続き、新たに大部な種子図鑑が発行された。光学顕微鏡による種実(種子と小型の乾果)・堅果・核果の核のカラー写真集で、1種につき1点、石川図鑑に似て1頁当たり6点の写真を2列に配し、日本産2,068種計2,068点の写真が収められている。著者らも言うようにこの数は日本産の種の半分にも満たないが、帰化植物も含め北は南千島から南は西表島までを視野に入れ、なおかつ亜熱帯の植物には特に配慮した内容になっているのが特徴である。写真頁には写真毎に和名・学名・撮影者名が記されているだけであるが、本の後半は写真番号に対応した解説頁となっていて、ここでは種子の大きさ・形・重さ・色・光沢の有無、1果実内の種子数などの種子の属性が細かく記述され、採集年月日や採集地などのデータも添えられている。種子の同定や研究にはかけがえのない著作といえるだろう。ただ、写真の解説がないだけに被写体となっているのが種子なのか果実なのかあるいは偽果なのかは解説を読みながら判断せねばならないことや、異なる植物に同じ学名が使われていたりすること、イネ科の果実がすべて瘦果とされている点など難点がないわけではない。(清水建美)

○ 大場達之(編・解説) : 山溪カラー名鑑 野の植物誌 A判12取, 468頁, 2000年7月1日, 山と溪谷社, 3,500円(税別)。

○ 大場達之(編・解説) : 山溪カラー名鑑 山の植物誌 A判12取, 456頁, 2000年7月1日, 山と溪谷社, 3,500円(税別)。

このほどおなじみの山溪からユニークなカラー名鑑が2冊出版された。これらは従来型の植物図鑑とは異なり、北海道から沖縄までの日本の風土は照葉樹林帯・夏緑林帯・ハイマツ帯を含む常緑針葉樹林帯・高山帯の4つのゾーンに加えて、人びとが田をすき畑を耕し町を築いた「まち」と自然の力と人の力が拮抗する半自然の「さと」の2つのブロックの環境空間からなるとする風土認識から出発する。そして、これらの環境

空間を40単位に区分し、単位ごとに代表的な植物を取り上げ、2冊で併せて825種の植物を解説するというスタイルとなっている。例えば、「野の植物誌」では「まち」「さと」および照葉樹林帯まで21単位を扱い、第1単位「畦道や路傍に咲く」ではスギナからヒガンバナまで29種の植物が登場するが、学名はなく、形態や類似植物との識別点といった記述も一切ない。解説の主眼は当該植物の生育地や群落、花期や種子散布の様子などもっぱら生態的な側面に置かれている。したがって、写真の配置は植物集団の姿を大きく写し、多くの場合花のアップを小さく添えるといった構図となっている。それは、植物を見るときには、自然の中から1本の草花を抜き出して見るのではなく、自然界での植物の集合の美にふれることから本当の複合された自然のしくみが理解されるのだという編者たちの強い主張があるからである。「山の植物誌」には夏緑林帯から高山帯までの19単位が収録されている。自然観察や自然教育には植物の名を教えるのみならずその集団としての生活ぶりにも踏み込むべきだという主張には大いに共感できるものがある (清水建美)

○ 富山昌克：ラン科植物のクローン増殖 B5判, 366頁, 2000年7月1日, トンボ出版, 6,000円(税別).

メリクロンの用語の誕生からもわかるように、現在の園芸界でのランの増殖はクローン増殖が大勢を占め、絶滅危惧植物のアツモリソウも各地でクローン増殖が試みられている。

このほど、自らメリクロンアーツ本社/研究所(藤井寺市)を設立し、富山蘭園(五条市)を主宰する若くてエネルギー著者がランのクローン増殖技術のすべてを網羅した大部な本を出版された。この本は第1部 メリクロン技術の基礎知識, 第2部 メリクロン技術の克服, 第3部 ラン栽培の科学の3部構成で、それぞれ20章, 16章, 8章からなる。面白いのは技術に関わる章は、読者の技術レベルに応じて初級・中級・上級の指示の下で記述されていることである。園芸関係の本には珍しく、第3部には「植物の名前とランの名前」「種とは何か」「種の保全を考える」などすぐれて植物学的な議論もあるし、巻末には用語解説も文献リストも完備されている。中には、たとえば品種と個体は同じものといった記述や巻頭のグラビアの栽培品の写真が原種として紹介されている点など腑に落ちない点も散見されるが、ランの栽培の現況を知り、栽培を進める上での得がたい参考文献として推薦したい。(清水建美)

○ 工藤 岳(編)：高山植物の自然史—お花畑の生態学 A5判, 222頁, 2000年6月25日, 北海道大学図書刊行会, 3,000円(税別).

極地・高山植物を研究対象としている中堅から若手の気鋭の研究者たちの手になる一般読者向け横書きの上記の本が出版された。この本は第1部 高山植物の起源, 第2部 高山環境と植物の分布, 第3部 高山植物の生活史特性, 第4部 環境変異と高山植物の適応反応の4部構成, 全13章からなり、各自が1章ずつの分担執筆となっている。視点は実に幅広く、対象地域は日本の高山帯だけでなく、熱帯高山を含む全球的な広がりをもつ。それぞれの章が執筆者が自らの最新の研究成果を紹介した内容であるだけに、今世界では極地・高山植物について何が問題で、何がどのように研究されているのかがよく分かり、高山植物に関心のある方にはぜひとも読んで頂きたい本である。章ごとに文献一覧があるのもありがたい。私は植物の生活史の研究は素人であるが、高山での芽ばえはハイマツといえども滅多に見かけることがない。要因は異なるだろうが、コタネキランでは4,000個もの種子のうち生き残るのは0.1個体にも満たないと指摘があるのはなるほどと思われる。とすると繁殖成功で結果や結実に成功しても個体新生はほとんど見込まれないことになる。真の繁殖成功というのは実生の定着までを含めないと意味をなさないのでないかと日頃感じている。(清水建美)

○ 石川県絶滅危惧植物調査会：石川県の絶滅のおそれのある野生生物—いしかわレッドデータブック〈植物編〉 A4判, 358頁, 2000年3月31日, 石川県環境安全部自然保護課, 4,300円, 千450円.

最近、各地方自治体からいわゆるレッドデータブックが相次いで刊行されている。このほど石川県で完成した植物(維管束植物)編が手元に届いた。このレッドデータブック作りは1997年から3年計画で、石川県地域植物研究会(古池博会長)を中心に組織された上記調査会によって進められた。

この本は、総論と各論の2部からなり、巻末に付表と付図が1件ずつ添えてある。植物種の選定は総論における十分な議論をふまえてなされているのが特に印象的で、その結果県内では白山の亜高山帯、高山帯のみに分布する植物および舳倉島と七ツ島のみに分布する植物はすべて絶滅の恐れのある地域個体群として扱われることになった。気候変動による植物帯の上昇によって、100年後には白山の高山帯の垂直幅はたった50mを残すだけになるという計算も説得力がある。御前峰や大汝峰の直下50mまでの範囲に、白山の高山植物すべてを収容することは到底無理である。各論では、はじめにレッドリストを掲げ、続いて各カテゴリーごとに

種類ごとの記述がある。ここでは、絶滅危惧種Ⅰ、Ⅱについては1頁当たり2種、準絶滅危惧種については4種が取り上げられ、前者では種類ごとに選定理由・形態・分布域・県内分布・生態など・生育環境・危険要因・特記事項の7項目、後者では選定理由・分布・危険要因・特記事項の4項目が1-5行程度で簡潔に述べられている。県内分布は付図1にある植物地理学上の小区系によって示されていて分布図はなく、生育地点の詳細には言及されていない。写真はオオサクラソウほか5種の表紙のカラー写真を除いて全くない。結局、採録された植物は、石川県産の全種数2,188種のうち639種(29.2%)であるという。なお、種類のみならず群落も取り上げられていて、各論編には保護を要する植物群落として126群落が指名されている。そのうち、7群落については名称にも場所を示さず、たとえば「……のサクラソウ」といった表記に止める配慮がなされている。

この本が、21世紀の生物多様性保全の指針として、石川県のみならず各地で多目的に利用されることを望んで止まない。
(清水建美)

○ 荻巣樹徳：幻の植物を追って A5判, 237頁, 2000年6月22日, 講談社, 3,200円(税別)。

1987年に四川大学の植物標本室を訪れた時、分類学教室主任に「日本人なら荻巣樹徳先生を知っているか」と尋ねられたことがある。当時、ようやく日中の大学・研究機関間で研究交流が始まったばかりであり、すでに四川大学名誉研究員として中国の植物を現地で研究している日本人がいるということを知り、大変驚いたのを覚えている。「プラントハンター」(1994年, 講談社)の著者白幡洋三郎氏は、現代における数少ないプラントハンターの一人として荻巣氏の名を挙げている。植物の魅力に引き寄せられた人という意味では的を得ているが、卓越したフィールドワーカー、プランツマンという方が適切かもしれない。その荻巣氏が「後世への遺産」として新聞に連載したものを単行本としてまとめたものが上記の書であり、植物関係者にとっては待望の書である。

本書は8章からなり、氏のフィールドである中国西部の植物を中心に、幻の植物、珍しい植物、観賞価値の高い植物などが解説、考察されている。文献資料で書かれたものでなく、全て著者自らの足で書かれたものだけに迫力と説得力があり、中でも著者によって再発見された「幻のバラ」ロサ・シネンシスや「幻のクリスマスローズ」ヘレボルス・チベタヌスのくだりは読物としても面白い。紹介されている植物は、中国関係だけでも約150種にのぼる。中国西部のイカリソウ、サクラソウ、メコノプシス、マグノリアなどの各属は特に詳しく、バラに関しては別に1章が設けられている。また、写真がすばらしい。植物学の教科書で図でしかお目にかかれなかったキングドニア(独葉草)やキルカエアステル(星葉草)、中国の国家級保護植物であるギンサン(銀杉)の自生状況など、カラー写真48頁118点にはすべて植物の学名と撮影データが付いている。一つ一つの写真が小さくなったのは残念だが、本文で登場する植物が数多く紹介されているのはありがたい。植物名索引はないが、目次に植物名の入った細項目があつてどこに何が書かれているのか把握でき、不便は感じなかった。

中国の植物に関心のある研究者だけでなく、園芸植物や中国の文化に興味を持つ人にもお勧めしたい。

(中田政司)

○ 日本さくらの会(編)：日本のさくら—20世紀の研究成果— A4判, 130頁, 2000年3月27日, 財団法人日本さくらの会。

日本さくらの会は、サクラの基礎的研究をすすめるべく、1991年11月8日第1回サクラ研究発表会を開催し、以来毎年11月にこの研究会をおこなっているという。今年には日本さくらの会の設立35周年で、その節目にあたり、これまでの研究論文をまとめたのが、この本である。この研究会のこれまでの9回の研究発表の題目が載っており、また、別誌「櫻の科学」の第1-6号の研究報告、資料、サクラ情報が各号毎に付記されている。

本書のメインパートは、日本のサクラの分類体系を川崎哲也氏が、ソメイヨシノにまつわる話を石川晶生氏が、しだれることの生理学的なことを中村輝子氏が、栽培・増殖・管理については横山敏孝氏がそれぞれ執筆されている。いずれも初心者に分かりやすく書かれており、日本のサクラを理解する上で役に立つ本である。いずれの章にも引用文献があり、便利である。

なお、本の購入希望者は、直接〒102-0093 東京都千代田区平河町2-3-19 麹町山嘴ビル(財)日本さくらの会へ申し込まれると、1冊2,000円(送料、消費税込)で購入できる。
(鳴橋直弘)

○ 兵庫・水辺ネットワーク (編) : オニバス文献集—*Euryale ferox* Salisb. A 4 判, 227 頁, 2000 年 3 月 27 日, 明石市環境部環境政策課 (非売品),

絶滅危惧水生植物オニバスを保護するために, 今までに出版された文献を可能な限り収録したのがこの本である。

本書にはオニバス関連文献目録があり, そこに 104 編の文献がでていますが, そのうち 53 編が複製転載されている。第 1 頁は東京日々新聞昭和 10 年 9 月 2 日の記事で, オニバスが富山県氷見郡十二町村で非常にびびこっていることがでていいる。地方の出版物など手に入りにくいものがでていて助かる。集められた文献のほとんどは全文が複写されており, オニバスを理解しようとする者には頼りになる本である。

なお, 本の入手希望者は直接〒673-8686 明石市中崎 1-5-1 明石市環境部環境政策課計画係 (担当: 阿部さん) へ申し込むこと。ただ, 残部がわずかなので, オニバスの研究・保存を行っている方や団体, あるいは図書館に限るとのことである。 (鳴橋直弘)

○ 大塚みゆき (編) : 別冊 NHK 趣味の園芸 四季の山野草栽培 A 4 変型判, 223 頁, 2000 年 4 月 20 日, 日本放送出版協会, 1,500 円 (税別)。

山野草を, 早春, 春, 夏, 秋冬に分け, 11 名の執筆者が, その植物の特徴や仲間を紹介し, 管理やふやし方について書いている。

本書にはミスミソウ, エビネ, サギソウ, カンアオイ, セッコク, オダマキ, オキナグサ, スミレの仲間, イカリソウの仲間, サクラソウの仲間など良く知られた山野草に加えて, イヌナズナ, ソルダネラ, ヒナソウ, レウシヤ, タツタソウ, タマシヤジン, タンコウソウなど外国産の見なれない山野草も出ている。

99 の植物群について, それらの植物の生育条件や栽培作業暦を示し, 栽培・管理上のポイント, ふやし方, 楽しみ方が記されている。また, 1 つの仲間には 1~10 枚 (普通 4~5 枚) のきれいな植物のカラー写真がある。巻末の「これだけは覚えてたい, 山野草の育て方・楽しみ方」は, 山野草の栽培の素人には有益な解説である。 (鳴橋直弘)

○ 小山鐵夫 (監修) : 牧野富太郎とマキシモヴィッチ A 4 判, 183 頁, 2000 年 1 月 31 日, 高知県立牧野植物園, 2,625 円 (税込み), 〒380 円。

本書は牧野富太郎記念館の開館記念特別展「牧野富太郎とマキシモヴィッチ」図録である。

マキシモヴィッチの生涯と業績のところでは, シベリアと日本の踏査地図がある。須川長之助の人物写真やマキシモヴィッチからの採集コテも面白い。日露学術交流では, 伊藤圭介, 伊藤篤太郎, 矢田部良吉, 松村任三, 田代安定, 田中芳男, 徳田佐一郎, 宮部金吾が人物写真とともに紹介されている。牧野富太郎とマキシモヴィッチのところでは, 若き日の牧野富太郎のことがよくわかるし, マキシモヴィッチとの関係もくわしく書かれている。ロシアに渡った標本たちのところは, ロシアに牧野富太郎が送った標本の写真と解説があり, ほとんどがタイプになっている重要な標本である。

日本の植物分類学において牧野富太郎の業績を超えるものはでないだろう。その偉大な人物にまつわる本である。楽しく無いわけがない。また, ロシア人マキシモヴィッチは日本の初期の植物分類学にこれほど影響を与えた人であったか, と再認識させられる。コマロフ植物研究所所蔵の標本の写真は美しく, ふんだんにあるカラー写真もきれいで見ていてとても楽しい。 (鳴橋直弘)

○ 藤原陸夫・松田義徳・阿部裕紀子 : 秋田県植物目録 第 9 版 A 4 判, 143 頁, 2000 年 5 月 31 日, 秋田植生研究会, 非売品。

秋田県植物目録は, 望月陸夫 (望月は藤原の旧姓) 氏によって 1972 年に本学会 (旧名 北陸の植物の会) より出版された。その後, 2 版 (1989), 3 版 (1991), 4 版 (1992), 5 版 (1993), 6 版 (1994), 7 版 (1995), 8 版 (1996) と改訂されてきた。第 9 版になってはじめて著者は 3 人になり, 本のサイズも B 5 判から A 4 判と大型になり, オーサーネームの省略も国際植物命名規約の勧告の付記に従っている。

本書は秋田県版レッドリスト作成の資料として活用され, この目録でもレッドリスト掲載植物の各カテゴリーが記号で付加されている。また本目録は分類系順, 学名の ABC 順, および和名五十音順になっており, 調べるのに便利である。

なお, 本の入手希望者は, 残部が少しあるとのことなので, 〒012-0804 秋田県湯沢市杉沢字森道上 239 松田義徳方 秋田植生研究会へ問い合わせるとよい。 (鳴橋直弘)